

修験道と山岳信仰

日光の山は、少なくとも紀元前 766 年には勝道上人（735-817）がこの地に到着して以来、信仰の対象となっていた。勝道上人とその信奉者たちは、仏教と役行者(634–c. 706)が開祖とされている修験道の両方を修行した。彼らは山を神だと信じていたが、それは仏教と神道の両方の性格を持っていた。

奥日光周辺の山の多くは、山頂に寺社があり、その多くは勝道上人とその弟子たちによって創建されたものである。彼らの修行には、何日も何週間もの長い山行が含まれていた。彼らはしばしば尾根に沿って移動し、指定された場所に立ち寄り、祈り、読経、護摩の火の儀式などの儀式を行った。かつては年に 4 回の長期巡礼が行われていた。現在も夏の風物詩となっているのが、8 月の第 1 週目に行われる登拝祭である。夜半から男体山に登り、日の出とともに山頂に到着して祈りを捧げる。

下記の地図には、山岳巡礼で使用されたものが掲載されている。

讚美歌を唱えるときに振るのは、金属製の輪っかがついた短手の杖である。これは、等身大の勝道上人が持っている杖を改造したものである。

藁の道具は冬用の靴とすね当てである。

杖と靴の左側には、背負っている筥（はこ）井（はこおい）がある。これには、お経や法具、仏像、衣類など、お遍路に使うものが入っている。

江戸時代以降

1617 年に徳川初代将軍家康（1543～1616）が日光の東照宮に祀られた後、日光は参拝客の人気スポットとなった。しかし、いくつかの理由から、奥日光を訪れるために華厳溪谷を登った人はほとんどいなかった。女性は奥日光の神聖な山に入ることが禁じられており、男性は許可を得る必要があった。牛や馬の乗り入れも禁止されていたため、観光客は徒歩でしか行くことができなかった。1868 年の一連の政府令により、全国的に宗教的慣習が改革された後、1871 年に制限は撤廃された。奥日光の神社や寺院は、信徒のための巡礼地としてますます人気が出てきた。1872 年には女性禁止令が解除され、中禅寺湖のほとりには、夏の間に男体山に登る参拝者のために多くの旅館がオープンした。しかし、厳しい冬のために、誰もが一年中奥日光に住むまでには多くの時間を要した。